

第 2 砲兵ニュース：中国の第 2 砲兵弾道ミサイルは、” 北斗衛星誘導システム” の使用を開始したか？

漢和防務評論 20130423

KDR 香港平可夫、インド A.RANJID 特電：

2012 年、中国の第 2 砲兵部隊は各種弾道ミサイルの発射実験を頻繁に行った。11 月の戦略弾道ミサイルの発射実験は国営マスメディアから確認を得た。軍の報道によると、戦略弾道ミサイルの発射は、習近平主席の指示によるものであった。12 月 10 日の新華社は、新型戦略弾道ミサイルの発射に成功したと報道した。2013 年 1 月、第 2 砲兵部隊は同時に弾道ミサイルの中段 (MID-COURSE) 迎撃実験を行った。

” 戦略弾道ミサイル” は、過去の閲兵式では DF-31 及び DF-21 と名付けられたミサイルだけが展示されている。

この 2 種類のミサイルの実験は、政治的に米国に向けられたものであり、中国は、米国が開発中の先進型弾道ミサイルに対する迎撃技術に不安があることを示している。しかしインドの官側の中国軍事問題アナリストはバンガロールにおいて本誌に対し次のように述べた。「最近の一連の弾道ミサイル特に” 新型弾道ミサイル” の発射実験は、” 北斗衛星誘導システム” による中段誘導システムを利用した可能性が極めて高い。これは中国の戦略弾道ミサイルの精度を飛躍的に向上させるであろう。特にインド及び” 第 2 世代北斗システム” がカバーするアジア地区において打撃精度が向上するであろう」と述べた。

2020 年、中国の” 全球北斗システム” が完成すると、DF-31A 等の大陸間弾道ミサイルは米国本土を精確に攻撃できるようになる。現在の段階では、DF-21 シリーズのような中距離弾道ミサイル及び CJ-10 巡航ミサイルに” 北斗衛星誘導システム” を利用することは可能だ。

中国は、近年来、GPS 民用版誘導装置を採用し CEP を 50 メートル以内に縮小した M-20、B611M 等射程 300 キロメートル以内の弾道ミサイルを輸出しようとしている。軍用の” 北斗” 誘導技術を採用すれば、DF-21 シリーズの命中精度は (CEP) は 150 メートル以内かそれ以上に精度が向上する可能性が極めて高い。

民用版の” 北斗” 誘導システムが無償で提供されると、短距離、中距離ミサイ

ルを含む北朝鮮の戦略兵器が”北斗”誘導システムを利用し打撃精度を大幅に高める可能性が極めて高いことを KDR は憂慮している。

KDR の記者が特に強い印象を受けたのは、北京電子工業技術展覧会に金正日バッチを付けた北朝鮮の軍事技術研究者が何度も訪れ、中国が開発した GPS/”北斗” (BEIDOU) 両用受信機器に強い興味を示したことだ。このことは彼らがこの技術を獲得したがつていることを示している。

第 2 世代”北斗” 民用版は、北朝鮮に密輸出される可能性があり、そうなると日本及びオーストラリアの米軍基地を標的とする射程 3000 キロメートル以下の中距離弾道ミサイルの打撃能力を高めることになる。当然、大量に配備された SCUD-C 型北朝鮮版短距離ミサイルは、”北斗” 誘導技術に換装することによって韓国に対する打撃能力を高めるであろう。

以上